

一冊の書物からほぐれ、紡がれたことばの綾織……

ジェロニモたちの偶景

不意に目のまえに降り立ったことば。その影にある思考のゆたかな^{さまよ}彷徨いの痕跡。
ことばの「かばそい水の流れ」を手がかりに、私たちの日々の思念と行動は紡が
れてゆく。たちはだかる壁に批判の穴を穿つ叛乱の小さな^{のみ}鑿の音がきこえてくる。
今福龍太『ジェロニモたちの方舟』(岩波書店刊)を靈感源として紡ぎだされ、偶然
と即興を頼りにそれぞれの場所へと自在に伸びていった、六つの景色と物語……

ストーリーテラー

叛史から□真島一郎(人類学)

世界から□中山智香子(社会思想史)

アメリカから□水島英己(詩人)

カリブ海から□中村隆之(カリブ海文学)

原子から□竹田信平(アーティスト)

呪言から□新井高子(詩人)

*

ジェロニモの遺言□今福龍太(批評家)

ストーリーテラー

出演者が語り部として次々と登場し、『ジェロニモたちの方舟』に触発された物語を語ります。

最後に著者がそれらに音楽とチャントで応答します。

未知の形式による〈ことばのキャンプファイア〉にどうぞご参集ください!



2015年8月7日(金) 17:30~20:00 [開場 17:00]

馬喰町ART+EAT

【参加費 ¥2,000 (1ドリンク+特別冊子付き)

定員 50 名。予約制。申込は 03-6413-8049

または info@art-eat.com へ】

<http://www.art-eat.com/>



東京都千代田区東神田 1-2-11 アガタ竹澤ビル 202 号 [当日はギャラリーにて飯野和好原画展開催中]



真島一郎 Ichiro Majima

社会人類学者。西アフリカ民族誌学専攻。コートディヴォワールで調査研究。編著に『誰が世界を翻訳するのか——アジア・アフリカの未来から』(人文書院)『20世紀〈アフリカ〉の個体形成』(平凡社)等。近年はセネガル庶民の言葉「ニヨン・ファル! (仲間じゃないか!)」に秘められた力の奥行きについて想いをめぐらす。

中山智香子 Chikako Nakayama

経済史家、社会思想史家。ウィーン大学にて経済学を修める。著書に『経済戦争の理論——大戦間期ウィーンとゲーム理論』(勁草書房)『経済ジェノサイド』(平凡社新書)等。世界を席卷する新自由主義経済の万能の神話を批判し、前にただ進むのではなく、変だと思ったら立ちどまる「デクノボー」的な生き方を、311以後の社会倫理の指針として掲げている。

水島英己 Hidemi Mizushima

詩人。奄美、徳之島生まれ。詩集に『今帰仁で泣く』『楽府』『小さなものの眠り』(思潮社)。この時計が／古くて新しい時を刻みはじめる／それよりも重要なことはない／ぼくは時と握手する／セント・オーガスティンが顔をそむける／その違和のなかを歩くしかない…。

——今福龍太『ジェロニモたちの方舟』(岩波書店、二〇一五)より

もはやアメリカにおいて、原初的叛乱者としてのジェロニモ直系の民族的系譜は途絶えたかもしれない。国家の同化圧力は、あまりにもみごとに、アメリカン・イデオロギーにたいする本質的な叛乱の芽を、摘み取ってきたからである。国家への従順と忠誠を条件に、庇護と自由をあたえるという欺瞞的な人民管理政策は、経済的な懐柔と、テクノロジによる監視技術の進展によって、ますます巧妙さを増しているともいえる。だが本書が群島のな旅のなかで考察してきたように、アメリカなる原理がグローバルな波に乗って世界を覆い尽くすほど、かえってジェロニモの情念は無数の場所に散布され、流亡し、あらたな抵抗の拠点を築いてきたのである。だからこそ信じねばならない。方舟にのって洪水を逃れたジェロニモたちが、その流亡の境涯のなかで、原初的叛乱を企てる未来の子供たちの体内に、青い血流をふたたび溢れさせるであろうことを。

今福龍太 Ryuta Imafuku

文化人類学者・批評家。メキシコ、キューバ、ブラジル、アメリカ南西部、奄美群島などに沈潜しつつ混合体と群島のエシックスを探究。著書に『群島 - 世界論』『ミニマ・グラシア』『薄墨色の文法』(岩波書店)等。近刊に『わたしたちは難破者である』(河出書房新社)。

中村隆之 Takayuki Nakamura

カリブ海フランス語文学専攻。著書に『カリブ - 世界論』(人文書院)、訳書にエドゥアール・グリッサン『フォークナー、ミシシッピ』(インスクリプト) J.M.G. ル・クレジオ『氷山へ』(水声社)等。マルチニックの詩人・思想家グリッサンの群島ヴィジョンの可能性を現代日本社会の政治・文化的窮地に向けて媒介する新進気鋭の研究者。

新井高子 Takako Arai

詩人。詩集に『タマシイ・ダンス』『ベットと織機』(未知谷)。詩と批評の雑誌『ミテ』編集人。言葉の肉体性、音響的な遊戯性、共同体的違和性を諷刺の効いた異語に乗せ、現代社会の説話を追求する。腹のなかで飼うことにするヨ／砕いて、／噛みしめた苦虫だから、／飲み込んじまオ／やがて蛾を吐き出そうとは 思わナイ／蝶になって飛ばうとも…。

竹田信平 Shinpei Takeda

アーティスト・映像作家。メキシコ・ティファナとドイツ・デュッセルドルフを拠点に制作。南北アメリカ在住の被爆者の証言を収集し、それを素材として映像やインスタレーション作品を手がけている。著書に『α崩壊』(現代書館)。本年8月に長崎県美術館にて個展「アンチ・モニュメント」を開催。



「ヒロシマの薔薇」

赤ん坊たちのことを思え
遠くから操られ 声をなくした彼らのことを
子供たちのことを思え
誤りによって 光を失った彼らのことを
女たちのことを思え
混乱に疲れ果て
ぼろぼろにされた彼女たちのことを
傷のことを思え
薔薇のように熱く燃える傷のことを
けれどそう 忘れてはいけない
薔薇のなかの薔薇のことは
ヒロシマの薔薇のことは
遺伝性の薔薇のことは
それは放射性の薔薇
愚かで無効の薔薇
硬くなって病んだ薔薇
それは原子でできた反・薔薇
色もなく 香りもない
薔薇ではなく なにもでもない
——ヴィニシウス・ジ・モライス

聞くがよい「どんな名であつても」よ
狼族のひとりよ 聞くがよい
私はおまえの骨を黒い火打石で蔽うだろう
それを羽根で蔽うだろう
なぜならおまえは空っぽの場所に
旅立とうとしているから
黒い大地がおまえをかくまうだろう
その国では 外は暗闇
聞くがよい
おまえの魂があふれようとしている
——チェロキー族のシャーマン